

紫紺染について

宮沢賢治

青空文庫

盛岡もりおかの産物さんぶつのなかに、紫紺染しこんぞめというものがあります。

これは、紫紺なんぶという桔梗ききようによく似た草にの根ねを、灰はいで煮に出して染そめるのです。

南部なんぶの紫紺染むかしは、昔は大へん名高いものだっただうですが、明治めいじになってからは、西せいよ洋うからやすいアニリン色素しきそがどんどんはいつて来いましたので、一向いつこうはやらなくなつて

しまいました。それが、ごくちかごろ、またさわぎ出でされました。けれどもなにぶん、し

ばらくすたれていたものですから、製法せいほうも染方そめかたも一向いわかりませんでした。そこで県け

工業会こうぎようかいの役員やくいんたちや、工芸学校こうげいの先生は、それについていろいろしらべました。

そしてとうとう、すっかり昔のようないものが出来るようになって、東京大博覧会とうきょうだいはくらんかい

へも出でましたし、二等賞にとうしょうも取りとりました。ここまでは、大だいてい誰だれでも知しっています。新聞

にも毎日出でていました。

ところが仲々なかなか、お役人方やくにんがたの苦心くしんは、新聞に出でているくらいのもではありませんで

した。その研究けんきゆう中ちゆうの一つのはなしです。

工芸学校こうげいの先生は、まず昔むかしの古い記録きろくに眼めをつけたのでした。そして図書館としよかんの二階かい

で、毎日黄いろに古びた写本しゃほんをしらべているうちに、遂ついにこういういいことを見附みづけま

した。

「一、山男 紫紺を売って酒を買い候事、

山男、西根山にて紫紺の根を掘り取り、夕景に至りて、ひそかに御城下（盛岡）

へ立ち出で候上、材木町生薬商人 近江屋源八に一俵二十五文にて売り候。

それより山男、酒屋半之助方へ参り、五合入程の瓢箪を差出し、この中に清酒

一斗お入れなされたくと申し候。半之助方小僧、身ぶるえしつ、酒一斗はとても入り兼

ね候と返答致し候処、山男、まずは入れなさるべく候と押して申し候。半之助も顔色青

ざめ委細承知と早口に申し候。扱、小僧ますをとって酒を入れ候に、酒は事もなく入り、

遂に正味一斗と相成り候。山男大に笑いて二十五文を置き、瓢箪をさげて立ち去り候趣、

材木町総代より御届け有之候。」

これを読んだとき、工芸学校の先生は、机を叩いて斯うひとりごとを言いました。

「なるほど、紫紺の職人はみな死んでしまった。生薬屋のおやじも死んだと。そうし

てみるとさしあたり、紫紺についての先輩は、今では山男だけというわけだ。よしよし、

一つ山男を呼び出して、聞いてみよう。」

そこで工芸学校の先生は、町の紫紺染研究会の人達と相談して、九月六日の

午後六時から、うちまるせいようけん内丸西洋軒で山男の招待会しょうたいかいをすることにきめました。そこで工芸学校の先生は、山男へ宛てて上手な手紙を書きました。山男がその手紙さえ見れば、きつともう出掛けて来るようにうまく書いたのです。そして桃いろの封筒へ入れて、岩手ぐんにしねやま郡西根山、山男殿と上書きをして、三銭の切手をはって、スポンと郵便函へ投げ込みました。

「ふん。こうさえしてしまえば、あとはむこうへ届こうが届くまいが、郵便屋の責任だ。」と先生はつぶやきました。

あつはつは。みなさん。とうとう九月六日になりました。夕方、紫紺染に熱心な人たちが、みんなで二十四人、内丸西洋軒に集まりました。

もう食堂しょくどうのしたくはすっかり出来て、扇風機はぶうぶうまわり、白いテーブル掛けは波をたてます。テーブルの上には、緑や黒の植木の鉢が立派にならび、極上等のパンやバターももう置かれました。台所だいどころの方からは、いい匂がぶんぶんします。みんなは、蚕種取締所設置の運動のことやなにか、いろいろ話し合いましたが、ころの中では誰もみんな、山男がほんとうにやって来るかどうかを、大へん心配していました。もし山男が来なかったら、仕方ないからみんなの懇親会ということにしようと、

めいめい考えていました。

ところが山男が、とうとうやって来ました。丁度、六時十五分前に一台の人力車がすうつと西洋軒の玄関にとまりました。みんなはそれ来たつと玄関にならんでむかえました。俵屋はまるでまっかになつて汗をたらしゆげをほうあげながら膝かけを取りました。するとゆつくりと俵から降りて来たのは黄金色目玉あかつらの西根山の山男でした。せなかに大きな桔梗の紋のついた夜具をのつしりと着込んで鼠色の袋のよな袴をどふつとはいておりました。そして大きな青い縞の財布を出して、

「くるまちゃんはいくら。」とききました。

俵屋はもう疲れてよろよろ倒れそうになつていましたがやつとのことで斯う云いました。「旦那さん。百八十両やつて下さい。俵はもうみしみし云っていますし私はこれから病院へはいります。」

すると山男は、

「うんもつともだ。さあこれだけやろう。つりは酒代だ。」と云いながらいくらだかわけのわからない大きな札を一枚出してすたすた玄関にのぼりました。みんなははあつとおじぎをしました。山男もしずかにおじぎを返しながら、

「いやこんにちは。お招きにあずかりまして大へん恐縮です。」と云いました。みんなは山男があんまり紳士風で立派なのですっかり愕ろいてしまいました。ただひとりその中に町はずれの本屋の主人が居ましたが山男の無暗にしか爪らしいのを見て思わずにやりとしました。それは昨日の夕方顔のまっかな蓑を着た大きな男が来て「知って置くべき日常の作法。」という本を買って行つたのでしたが山男がその男にそっくりだったのです。

とにかくみんなは山男をすぐ食堂に案内しました。そして一緒にこしかけました。山男が腰かけた椅子はがりがりつと鳴りました。山男は腰かけるとこんどは黄金色の目玉を据えてじつとパンや塩やバターを見つめ「以下原稿一枚？なし」

どうしてかと云うともし山男が洋行したとするとやっぱ船に乗らなければならない、山男が船に乗って上海に寄つたりするのはあんまりおかしいと会長さんは考えたのでした。

さてだんだん食事が進んではなしもはずみました。

「いやじつさいあの辺はひどい処だよ。どうも六百からの棄権ですからな。」

なんて云っている人もあり一方ではそろそろ大切な用談ようだんがはじまりかけました。

「ええと、失礼しつれいですが山男さん、あなたはおいくつでいらつしやいますか。」

「二十九です。」

「お若いわかですな。やはり一年は三百六十五日ですか。」

「一年は三百六十五日のときも三百六十六日のときもあります。」

「あなたはふだんどんなものをおあがりになりますか。」

「さよう。栗くりの実みやわらびや野菜やさいです。」

「野菜はあなたがおつくりになるのですか。」

「お日さまがおつくりになるのです。」

「どんなものですか。」

「さよう。みず、ほうな、しどけ、うど、そのほか、しめじ、きんたけなどです。」

「今年はどうの出来がどうですか。」

「なかなかいいようですが、少しかおりが不足ふそくですな。」

「雨かんけいの關係かんけいでしょうかな。」

「そうです。しかしどうしてもアスパラガスには叶かないませんな。」

「へえ」

「アスパラガスやちしやのようなものが山野に自生するようにならないと産さんぎよう業もほんとうではありませんな。」

「へえ。ずいぶんなご卓たっけん見です。しかしあなたは紫紺しこんのことはよくごぞんじでしょうな。」

みんなはしいんとなりました。これが今夜の眼がんもく目だったのです。山男はお酒さけをかぶりのと呑いんで云いいました。

「しこん、しこんと。はてな聞いたようなことだがどうもよくわかりません。やはり知らないのですな。」みんなはがっかりしてしまいました。なんだ、紫紺のことも知らない山男など一向いつこう用はないこんなやつに酒を呑のませたりしてつまらないことをした。もうあとはおれたちの懇親こんしんかい会だ、と云うつもりでめいめい勝手かってにのんで勝手にたべました。ところが山男にはそれが大へんうれしかったようでした。しきりにかぶりかぶりとお酒をのみました。お魚が出ると丸ごとけろりとたべました。野菜やさいが出ると手をふところに入れたまま舌しただけ出してべろりとなめてしまします。

そして眼めをまっかにして「へろれって、へろれって、けろれって、へろれって。」なん

て途方とほうもない声で咆えはじめました。さあみんなはだんだん気味悪きみわるくなりました。おまけに給仕きゆうじがテーブルのはじの方で新らしいお酒の瓶びんを抜ぬいたときなどは山男は手を長くながくのばして横よこから取とつてしまつてラツパ呑みをはじめましたのでぶるぶるふるえ出した人もありました。そこで研けん究きゆう会かいの会長さんは元来がんらいおさむらいでしたから考えました（これはどうもいかん。けしからん。こうみだれてしまつては仕方しかたがない。一つひきしめてやろう。）くだものの出たのを合図あいずに会長さんは立ちあがりました。けれども会長さんももうへろへろ酔よつていたのです。

「ええ一寸ちよつと一言あいさつご挨拶さつもう申まうしあげます。今晩こんばんはお客様きやくさまにはよくおいで下さいました。どうかおゆるりとおくつろぎ下さい。さて現今げんこん世界せかいの大勢たいせいを見るに実じつにどうもこゝろらんしている。ひとのものを横合よこあいからとるようなことが多い。実にふんがいにたえない。まだ世界は野蛮やばんからぬけない。けしからん。くそつ。ちよつ。」

会長さんはまっかになつてどなりました。みんなはびっくりしてばくばく会長の袖そでを引つぱつて無理むりに座すわらせました。

すると山男は面倒臭めんどうくさそうにふところから手を出して立ちあがりました。「ええ一寸ちよつと一言いちごんご挨拶さつもうを申し上げます。今晩こんばんはあついおもてなしにあずかりまして千万せんばんかたじけ

なく思います。どういうわけでこんなおもてなしにあずかるのか先刻からしきりに考えているのです。やはりどうもその先頃おたずねにあずかった紫紺についてのようであります。そうしてみると私も本気で考え出さなければなりません。そう思つて一生懸命思い出しました。ところが私は子供のとき母が乳がなくて濁り酒で育ててもらつたためにひどいアルコール中毒なのであります。お酒を呑まないと物を忘れるので丁度みなさまの反対であります。そのためについてビールも一本失礼いたしました。そしてそのお蔭でやつとおもいだしました。あれは現今西根山にはたくさんございます。私のおやじなどはしじゅうあれを掘つて町へ来て売つてお酒にかえたというはなしであります。おやじがどうもちかごろ紫紺も買う人はなし困つたと云つてこぼしているのも聞いたことがあります。それからあれを染めるには何でも黒いしめった土をつかうというはなしもぼんやりおぼえています。紫紺についてわたくしの知っているのはこれだけであります。それで何かのご参考になればまことにしあわせです。さて考えてみますとありがたいはなしでございます。私のおやじは紫紺の根を掘つて来てお酒ととりかえましたが私は紫紺のはなしを一寸すればこんなに酔うくらいまでお酒が呑めるのです。

「そんなに酔うくらいです。」

山男は赤くなつた顔を一つ右手でしごいて席へ座りました。

みんなはざわざわしました。工芸学校の先生は「黒いしめつた土を使うこと」と手帳へ書いてポケットにしまいました。

そこでみんなは青いりんごの皮をむきはじめました。山男もむいてたべました。そして実をすつかりたべてからこんどはかまどをぱくりとたべました。それからちよつとそばをたべるような風にして皮もたべました。工芸学校の先生はちらつとそれを見ましたが知らないふりをしておりました。

さてだんだん夜も更けましたので会長さんが立つて、

「やあこれで解散だ。諸君めでたしめでたし。ワツハツハ。」とやって会は終りました。

そこで山男は顔をまっかにして肩をゆすつて一度にはしごだんを四つくらいずつ飛んで玄関へ降りて行きました。

みんなが見送ろうとあとをついて玄関まで行つたときは山男はもう居ませんでした。

丁度七つの森の一番はじめの森に片脚をかけたところだったのです。

さて紫紺染が東京大博覧会で二等賞をとるまでにはこんな苦心もあったという

だけのおはなしであります。

青空文庫情報

底本：「ポラーノの広場」角川文庫、角川書店

1996（平成8）年6月25日初版発行

底本の親本：「新校本 宮澤賢治全集」筑摩書房

1995（平成7）年7月5日～

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年5月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

紫紺染について

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>